第三百八十回　青葉会　〈年忘れ句会〉

平成二十九年十一月三十日（木）　鈴本演芸場（昼の部）→築地「紅蘭」

〈顧問〉☆川合万里子　先生
〈選者〉◎川口孤舟
〈出席者〉伊賀山そらお　今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子
在間千恵（新人）　朱牟田恵洲　土谷堂哉　豊田ゆたか　中野一灯　星田啓子　山田けい子
山内天牛
〈投句〉楠田彦十　古田昇　宮内規雄　山崎亜也
〈紙上選句〉赤田堅　安部眞希子　庄司龍平　高橋敏郎　早川允章　福島正明　村田くに子　山本三恵
《互選句》

十点
◎冬ざれて老手品師の指の先　けい子（堅・忠・孤・五・弘・恵・ゆ・允・く・天）

八点
◎子のやうな母の爪切る日向ぼこ　堂哉（そ・猛・孤・弘・恵・允・啓・三）

六点
◎大熊手どうだと高く担ぎけり　けい子（孤・弘・千・灯・啓・天）
☆◎短日や役目を終えし乾船渠（からドック）　亜也（孤・万・五・龍・灯・三）

五点
☆初雪や和傘行き交ふ先斗町　孤舟（眞・万・そ・く・天）
☆◎打ち出しの太鼓背（そびら）に酉の市　弘子（孤・万・く・け・三）
（☆…上五→「打ち出の太鼓を背に聴く酉の市」）
秋高し馬柵（ませ）なき牧を放ち馬　一灯（弘・恵・ゆ・允・三）
真打も前座の風情も年の暮　ゆたか（堅・猛・五・恵・敏）
☆紙切りに世相照らして暮の寄席　啓子（眞・万・忠・弘・堂）
（☆…中七→「世相を照らし」）

四点
☆◎夜神楽や人々急かす笛太鼓　そらお（孤・万・敏・啓）
☆一席聴き二句を投じて三の酉　紀久男（万・忠・啓・く）
☆小春日やはぐれ雀の居付きをり　仝（万・千・敏・堂）
（☆…下五→「居着きをり」）
煤（すす）逃げや芝居古本捨てかねて　仝（弘・ゆ・啓・天）
☆しなやかに去る文菊の足袋姿　忠彦（万・五・灯・け）
（☆…「足袋姿」は季語にならないのでは？）
砂山の風紋崩れ冬ざるる　孤舟（恵・正・け・天）
待ってたの思はずふふふあんぽ柿　千恵（そ・猛・允・天）
☆秋麗ら老いらくの恋ごっこせん　恵洲（万・紀・五・け）
（☆…下五→「ごっこせむ」）
あの人もこの人も星賀状書く　ゆたか（五・灯・允・正）
労苦刈る棚田の米の旨しこと　啓子（猛・龍・ゆ・天）
（☆…下五→「旨きこと」）

三点
☆底冷えに会話のはづむ足湯かな　そらお（眞・万・正）
☆秋日和波止場にぎはすクルーズ船　仝（眞・万・正）
継ぎ目なき空の碧さよ雁の列　孤舟（猛・弘・允）
◎間男と間抜けな亭主暮の寄席　弘子（猛・忠・孤）
☆おでんごと銚釐（ちろり）温める屋台かな　恵洲（紀・万・堂）
☆三線に浮かれ泡盛夜長かな　堂哉（堅・万・敏）
☆終バスへ落葉しぐれの山路急く　一灯（眞・万・堂）
風起す軍鶏の羽搏き龍馬の忌　仝（眞・啓・け）
☆清閑と生きし妻なり姫椿　規雄（万・堂・く）
☆紅葉葉（もみちば）の虫食ひ愛し絵筆執る　啓子（そ・万・ゆ）

二点

☆十三夜過雁（かがん）なしとて万金に　猛（万・三）
日々変る秋色の景我が家まで　全（堅・龍）
一九には小さんのかをり師走寄席　忠彦（紀・千）
黒光る小満んの渋さ夜鷹蕎麦　全（堅・紀）
☆山茶花の垣の高みに咲き初める　彦十（紀・万）
（☆…文章的なので俳句調に→「山茶花や垣の高みに咲き初め」）
葱好きの家庭にひとり葱嫌ひ　全（千・恵）
蒼天の寄席の幟も師走かな　全（紀・け）
口切りや呂栄の壺を転ばして　五郎太（け・三）
☆手打ちして担がれてゆく大熊手　弘子（紀・万）
秋の朝光の道の浮かぶ海　千恵（そ・堂）
☆◎猪鹿可熊狸不可薬喰ひ　恵洲（孤・万）
古びたる第九の楽譜冬に入る　堂哉（五・正）
澄み渡る明日香の秋を惜しみけり　全（猛・龍）
☆羽織脱ぐ二枚目熱演紅葉雨　ゆたか（万・敏）
（☆…三段切れにならないように→「羽織脱ぎ二枚目熱演紅葉雨」）
◎霧襖脱ぐや峨々たる岩襖　一灯（孤・ゆ）
☆学び舎の記念樹の花返り咲く　昇（万・灯）
☆刈り終へし田に悄然と鷺一羽　啓子（万・灯）
妻の忌や山茶花散るを遠く見て　規雄（堂・啓）
◎百名山残す二十余冬に入る　亜也（孤・恵）
風に添ひ風に抗がふ冬薔薇　けい子（灯・く）
夕暮れて迷ふも楽しおでん屋へ　全（堅・千）
逸品なり一九の芝浜冬の空　天牛（忠・千）
大阪弁うまし菊之丞冬の寄席　全（紀・忠）

一点

☆玉堂の絵に添ふ筝の冴え冴えと　紀久男（万）
山肌をしづかに冬の降（お）り来たり　孤舟（そ）
☆逝きし友書を残せし神無月　五郎太（万）
（☆…語順を変えて→「書を残し友逝きしかな神無月」）
冬の山ストウパまわる輪に混る　全（紀）
☆もみじ狩り散歩道でもそれなりに　千恵（万）
仁清の藤の景色に魅入る秋　全（紀）
☆時蕎麦めき硬貨で払ふ暮の市　恵洲（万）
この紅葉愛でしや隠れキリシタン　堂哉（ゆ）
☆蠟梅や莟小鳥に啄まれ　ゆたか（万）
（☆…中七が字余りになるが→「蠟梅や莟を小鳥に啄まれ」）
輪を高み鳶の笛鳴るみかん山　一灯（そ）
古希なるも勲章無縁文化の日　昇（龍）
越前の蟹食べ疲る解禁日　啓子（龍）
独り居て寂しくもなし日向ぼこ　けい子（敏）
三の酉私しや上野で落語聴く　天牛（忠）
クリスマスの切り絵を所望鈴本亭　全（正）

●次回青葉会

正月五日（金）　初芝居総見
新橋演舞場（昼の部）
一月二十五日（木）　初句会　文京区民センター　午后五時半～八時半

以上　文責　紀久男

平成二十九年十二月句会報　〈年忘れ句会〉

一　今回は大阪の堂哉さん、名古屋からけい子さん、新人の千恵さんなど１５名参加。投句４名。昼の鈴本は１２名が見物され師走の寄席の風情を味わい句に詠まれております。句会はシェフ心尽しの料理と寄贈の美酒六本を賞味し乍ら猛さんの進行役で御覧のように遠来のお二人（けい子さん、堂哉さん）と亜也さんが高得点でした。忘年句会は３句～５句の出句なんですが今回は皆さん気合入り、５句出されしかも好句佳汁多い為、紙上選句を例月通りお願いすることと致しました。
酒の寄贈主はけい子さん、啓子さん、そらおさん、弘子さん、鈴木圭介さん、健介さんの六名の方々で、酒は全員で飲み干しました。
◎回覧（一）孤舟選者の「丘の風」（三田俳句丘の会）（二）恭延さん追悼句（未掲載の陽亮さんのお葉書）（三）万里子先生からの一筆箋（四）眞希子さんからのお葉書（五）初芝居のチラシ（六）けい子さん娘さんのジャズライブ・チラシ。
◎本年の功労者へカレンダー進呈…孤舟選者、弘子さん、天牛さん、忠彦さんへ国立劇場、落語協会各一本、歌舞伎座二本。

二　関係者近詠

雨上り蝉の斉唱大合唱　万里子
落蟬に入む蝉時雨同窓会　全
母校から句帖へ若葉一枚を　全
台風来小川たちまち道と化し　全
落梅を拾ひ集める朝まだき　全
茄子の馬抱き祖父と行きし魂迎　全
天窓を覗く満月魂祭　全
吾亦紅単語並べてＣメール　眞希子
新小豆すぐ煮え介護の一品に　全
貧乏くじ引けるが度量鰯雲　全
友垣に寡婦の増えゆく花千草　全
牧師招聘へ秋の日本を西東　全
白萩や今日より縁の寺となる　弘子
切らぬやう梨の皮剥き妣のこと　全
きちきちの胸反らすかに沖の雲　全
抱く指に深き骨相秋の猫　全
夫婦連れに遇うて身に入む風一陣　青史
白桃の届きし日より落着かず　全
笑み掛くることが介護よをみなへし　全
流星に妻の上託し寝ねにけり　全
爽やかや至芸に酔ふや木挽町　東紀
出棺に「有難う！」の声秋の薔薇　全

―「森の座」１２月号

恭延さん追悼句

仰ぎ見よあんな高みに寒昴　青史

三　社友会ＨＰ投句より佳作を勝手乍ら列挙しました。

瀬の音に駆け出し行けば曼珠沙華　白石寿太郎
明日香路の夢の続きや曼珠沙華　全
落日の広野を染める彼岸花　西脇修
苔岩にそつと寄り添う落ち葉かな　全
紅葉はらり借り来し賢治詩集より　恵洲
開山は宋の僧なり紅葉寺　長谷見敏
蹲ひに紅葉ひとひら躙り口　天牛

平成二十九年十二月二十日

凡庸に咲きて静けし石蕗の花　盛雄
時雨るるや通学電車ただ一輛　健介
天高く枯れぬ壮気や吉右衛門　紀久男
大詰の殺し場浄む望の月　全

―きさらぎ句会１１月

なまはげの吠え星空を湧き立たす　孤舟
冴返る朝や寄り目の卵焼　全
蒼天と明日を映す石鹸玉　全
風船の転がつてゐる汀かな　全
櫂を漕ぐ一寸法師花筏　全
銀輪の列新緑の風となる　全
むささびの飛んで星夜の忍者めく　全
潮鳴りの他は聞こえず冬銀河　全
何の咎めか鮟鱇の吊し切り　全
クリスマスレコード盤の針流れ　全

―「丘の風」１１月号自選１０句

冬枯れの小岩井牧場赤き頬　正明
点滅する留守番ボタン年の暮　全
熱燗や飲み歩きたくなる町いくつ　允章
小春日や鯉が鼻面寄せ合ひて　全
禅林の苔つややかに冬紅葉　全
玉堂の絵に千鳥の曲やデュオの冴ゆ　紀久男
冬晴れや先輩偲ぶ茶碗酒　全
小春日や掛け声決めて雑踏へ　全

蹲踞に色寄り合ひて夕紅葉　中川雅夫
ひだまりに連なる影やつるし柿　玉置貞義
晩秋の斜光を映す吊し柿　植松滋
吊し柿幼き頃の疎開先　岡崎誠之助
秋尽くし腕突き出すや床の子規　榎原等

紀久男記